



1989年7月

# ニュース NO.9

日本工学アカデミー広報委員会

事務局：〒140 東京都品川区大井1-49-15

(住友生命大井町ビル8階)

TEL：(03) 777-2 9 4 1

FAX：(03) 777-4 9 4 1

## 新会長に向坊 隆 副会長 —小林会長は名誉会長に—

平成元年5月15日(月)に開催された日本工学アカデミー第3回通常総会において、理事会より平成元年度新役員構成(案)が提案され、新会長に向坊隆副会長を迎えることが満場一致で了承された。

これに伴い、小林会長を名誉会長として推戴することが同時に了承された。

### 会長就任にあたって

向 坊 隆



今回はからずも小林前会長のあとをお引受けすることになりました。日本工学アカデミーが初代会長として世界的な御活躍をされている小林大先輩を初代会長にお迎え出来たことは誠に有難いことでした。お蔭様で国内で工学界や産業技術の面で指導的な役割を果たしておられる方々の御賛同を得てアカデミーが発足し、海外のアカデミーとも密接な関係をもって、一応の軌道にのることが出来たのでした。

大先輩のあとを受けた力不足の私としては重荷に堪えない気持ではありますが、副会長や理事をはじめ多くの熱心な方々の御助力を得て、何とか大任を果たしたいと思いますので、何卒宜しくお願い致します。

わが国は幸にして著しい経済成長を遂げ、生活水準も向上致しましたが、今後一層の発展を続けるためには、今迄にも増した努力が必要と思われます。それには技術・経済の問題もありますが、積極的な面で最も大きな貢献をなすのは科学技術だろう

と思います。

科学技術の発展のためには教育をはじめ研究環境の整備、産官学の共同などについての工学関係者の密接な協力が不可欠であります。その意味において工学アカデミーの果すべき役割は極めて大きいといわねばなりません。

科学技術では国際間での協力や競争が益々重要になると考えられます。アカデミーとしても、国内的な活動のみでなく、先発の諸外国のアカデミーの活動に学び、協力を進めることになるでしょう。

わがアカデミーは、会員相互の親睦に止まらず、上に述べたような目標に向かって活動すると同時に、内外に向かってその成果を発表し、場合によっては然るべき機関に対して進言したり勧告したりすることも必要と思います。

会員の個人会費のみに頼って運営されているわがアカデミーは、今のところ経済的基礎が必ずしも充分でない悩みを抱えております。

この点は会員の増加をはかると共に、活動の拡大の中で財政的強化も検討して行く必要があると思います。特に海外との協力を、拡大するためには、今の状態のままでは限界があるでしょう。

会の活動のために、御盡力願っている会員や事務局の方々に感謝すると共に、今後の一層の努力をお願いして就任の御挨拶と致します。

### 小林前会長の挨拶

この度、会長役交代にあたり、一言、ご挨拶を申し上げます。

私は、3年前の、本アカデミー設立にあたって、図らずも初代の会長を仰せつかりました。

本当は、その任ではないとして辞退致したい処でしたが、皆さんからのたっのご要請黙しがたく、お引き受け致した次第でした。

それに、本アカデミー設立以前に、諸外国の既存のこの種の組織から、いろいろなアプローチがあり、図らずも私が、個人的にこれに対処してきたという

経緯から、いささか責任を感じていたことも、お引き受けした理由の一つです。

しかし実を云いますと、私には、本アカデミーの会長としての最適任者のお名前が、最初から私の意中に有ったのです。

お蔭さまで、本アカデミーも、会員諸氏のご努力により、立派に軌道に乗りました。そこで愈々会長の席を、その本命の方に明け渡すべき時期にきたものと考えた次第です。そしてそのお方とは、言うまでもなく、向坊新会長のことです。

どうぞ、新会長のもとに、会員諸氏、一致協力し

て、なお一層の活発な活動を展開されることを期待しております。

さて、私は、もうこれでお役御免とっておりましたところ、図らずもまた、顧問・名誉会長という称号を頂戴し、まことに恐縮の至りです。そこで、これからも、何かお役に立つことがあれば、協力を惜しまぬつもりです。

会長退任にあたり、在任中、皆様から頂きました絶大なご支援に対し、深甚の感謝の意を表しますとともに、本アカデミーの益々のご発展を祈る次第です。

### 第3回 通常総会開催さる

平成元年5月15日(月)  
於 (株)日本工業倶楽部

日本工学アカデミー第3回通常総会は、平成元年5月15日(月)14:30より、昨年・一昨年と同じ、千代田区丸の内1-4-6、日本工業倶楽部会館2階大会堂において開催された。

総会は、定刻14時30分、会則(4-11)により、小林会長が議長席に着き、「本日の出席正会員は45名、委任状を寄せられた会員254名で計299名となり、会則(5-16)に示される会員総数(480名)の10分の1以上の定数に達しておりますので、総会は成立いたしました」との開会宣言があり、議事が進められた。

議事は既に全会員に提示されていた次の議題について審議が行われた。

- I. 昭和63年度事業報告、収支決算報告について
- II. 平成元年度事業計画および収支予算計画(案)
- III. 平成元年度日本工学アカデミー役員構成(案)
- IV. 工学アカデミー連合への加盟について  
(詳細は同封の総会資料参照)

昭和63年度事業報告は、平山理事、平成元年度事業計画について堀理事、昭和63年度決算報告および平成元年度予算案について今泉理事から、また平成元年度の役員構成ならびに工学アカデミー連合への加盟について堀理事から説明・提案があり、4議題とも満場一致で了承された。

小林議長の閉会宣言のあと、小林会長から退任の挨拶、向坊新会長から就任の挨拶があり、新旧両会長の固い握手が交わされ、第3回通常総会は無事予定通り閉会となった。

○閉会后、休憩をにおいて、三菱重工業株式会社取締役社長・飯田庸太郎氏(会員)の特別講演「我が国の科学技術」が開催され、この頃参加者は約90名となり盛会であった(別掲載の項参照)。

○各委員会・各専門部会の活動状況報告

次に16:30より約1時間に亙り、各委員会・各専門部会の活動状況について、各委員長・部会長・



幹事からそれぞれ報告がなされ、会員の理解を深めることができた。説明者は、

会員選考委員会：中川良一委員長  
政策委員会：石原智男幹事（堀総務担当）  
国際委員会：猪瀬博委員長  
広報委員会：杉本正雄委員長  
材料専門部会：斎藤進六部会長  
情報専門部会：小口文一部会長

バイオ専門部会：遠藤 勲委員  
であり、それぞれ詳細な経過報告および今後の計画について報告があった。

-----  
○懇親会

17：30より、恒例の懇親会は小林前会長の挨拶ならびに向坊新会長の乾杯により始められ、設立当時の思い出話等で盛りあがりを見せた。

---

## 日本工学アカデミー特別講演 「我が国の科学技術」(要旨)

---

平成元年 5月 15日  
三菱重工業株式会社  
飯田 庸太郎

### 1. はじめに

戦前、橋田邦彦先生や寺田寅彦先生がご活躍されていた頃、「科学する心」が尊ばれ、「科学」と「技術」は全く別物と言う思想であったが、それがいつの間にか「科学」と「技術」が結ばれて、最近は何の疑いもなく「科学技術」と言う言葉が使われている。これは我が国に自主技術が根付いて来た結果と考えられる。

借り物でない、本当の自主技術を確立するには、科学的な原理や原則をきちんと理解し、ものごとの根本をしっかり押さえる必要がある。科学する気持ちで基礎をしっかり固め、技術の成り立ちを十分理解して、応用の効く、展開力のある技術を作り上げていくことが、技術を自分のものにすることであり、小手先だけでは、揺るぎない自主技術は我がものにはできない。

### 2. 我が国重工業の発展と自主技術化への取り組み

明治維新以来、東洋の資源のない小国日本が、大方の予想をくつがえすような大発展をとげた原動力は、日本人の実直さ、勤勉さを支えにした驚異的な

工業国への変貌が根本原因である。第二次世界大戦で徹底的に打ちのめされた日本が、わずか40年の間にGNP世界第2位までのしあがったのも、工業国日本の実力で勝ちえた栄光である。

敗戦の混乱の中で、我が国が工業の立直りを急ぐには、まず技術導入で製品を作ることが効果的であったため、重厚長大企業は戦後相当長期にわたって多数の技術導入を行い、日本独自の優れた生産技術によって非常に信頼性の高い製品を、大変効率よく、低コストで作ることによって、すばらしい発展を遂げ、更に、40年頃からは自主技術開発の気運も高まり、独自の製品が数多く生産されるようになって来た。

科学技術に立脚した自主技術の力は大きく、企業が生き続ける源泉であり、特にこれからの時代は、一流の物で差をつけ続けていかなければ、競争には勝ち残ることはできない。一流の製品は、それを支える基盤となる全ての技術が一流でなければならぬ。そして一流の技術というのは、自分の身に着いた、心をかよわせられる技術即ち高度な科学技術を基盤にした自主技術ではないと育ち得ないのである。

### 3. 重厚長大産業のリストラクチャリング

現在は技術革新の時代だと言われている。確かにエレクトロニクスを中心とする先端分野、軽薄短小分野の技術革新は急速に進展しているが、技術革新は人類始まって以来常に進められてきたものであり、各時代においてはそれぞれの時代のブレークスルー的技術革新があり、それらがそれぞれの時代の技術の発展をリードして来たと思う。

資源に恵まれない日本、国土の狭隘な日本にとって何より必要なことは、世界の何れにも負けない工業力の維持発展で、これを支えたものは重厚長大産



業そのものであり、軽薄短小産業だけでは今日の経済大国、日本はあり得ない。しかしながら、重厚長大産業も、従来の路線に乗ったまま続けていたのでは、行き詰まってしまう部分も出てくる。軽薄短小産業が重厚長大産業の基盤の上に立って、あるいは重厚長大産業と結び付くことによって成長が出来ると同時に、重厚長大産業は軽薄短小産業によって活性化されることにより発展して行くものであり、先端技術すなわち軽薄短小技術を自分の中に積極的に取り込み、より大きな飛躍に挑戦して行かねばならない。

#### 4. 企業の科学技術への取り組みについて

新しいモノを創るには、その基になる技術とモノを作り上げて行くコンセプトをしっかりと持つことが基本である。そのためには、物や現象をよく見て、その現象を支配している基本原則、必然性のある本質をきちんと把握して、そこから新しい概念を確立し、それに沿った実用技術の構築を進めて行くと言った、課題を見出し、取り組んでいく姿勢や態度が重要である。「工学」に於ける科学技術への取り組み姿勢と何等変わる所がなく、ただ、企業の場合には、その対象の選定あるいは課題解明の意識の面で、社会的効用に対するイメージがより強い。これからは、企業に於いても、科学の領域にまで踏み込んだ探索的基礎研究への取り組みの必要性が格段に増し、官・学との連携が必然的に一層高まると考えられている。

#### 5. 当社の科学技術—研究開発への取り組み

当社は、61年8月「基盤技術研究所」を設立し、62年11月横浜の金沢地区に新たに建物を作り100人程の研究者をここに集めた。既存の研究所がどちらかといえば開発研究部門であるのに対し、この「基盤技術研究所」はそれらを支える基礎研究部門であり、必要があれば科学技術の領域にも踏み込んだ基礎研究を行ない、その中から当社事業の次の時代のための基盤となる先端技術や先行基礎技術の研究への取り組みを強化することにより、新技術・新製品

の開発を一気に加速していこうという狙いである。

#### 6. おわりに

最後に、ご列席の諸先輩へのお願いを含めて、常々大事だと思っていることを3点申し上げ、話しの締め括りとする。

まず、第一点は、科学技術を担う「人」を育てることである。最近学生の製造業離れが話題になっている。米国では学生の製造業離れによって産業の空洞化が進んだと云われている。資源の少ない我が国は、物づくりを基本に、技術によって国を立てていくしか他に道はない。そのためにも、我々は、重厚長大企業を、発想の豊かな人材が情熱を傾けて物創りに取り組める魅力ある産業に再構築し、優秀な人材を物創りの世界に取り戻さねばならない。

第2点は、産・官・学の連携の問題である。特に、科学技術と一語で言われるような時代になったことを考えると、産官学の仕切を少し緩やかにして、人を中心にモノを含めた交流を促進させ、科学と技術が互いに刺激し合えるような、相互乗り入れのシステムを考える必要がある。更に、最近の様に科学の領域まで立入って積み上げる必要があったり、プロジェクトが大形化すれば、費用負担の面でも産官学の連携は必然的に、一層と強まるものと予想される。

第3点は、国際協力のあり方の問題である。資源のない我が国の経済発展のベースは輸出であるが、それを続けていくためには世界の国々から歓迎され尊敬されるような行動をとらなければならない。ただ製品を輸出して行くだけでなく、それぞれの国が自立してやっ行くために必要とする技術の提供は勿論のこと、それらを守り育てて行けるような人材を育てることに手も貸さねばならない。基礎技術を提供しても、その国の産業基盤に定着しなければ立ち枯れてしまう。企業と国と大学が協力して、相手国のニーズに本当に合った独創的技術を創り上げ、我が国が得意とする応用・開発のノウハウを注ぎ込み、産業機械などの形あるモノに仕上げ提供していくのが、これからの真の国際貢献であろう。

---

## 国際フォーラム —Dual Use Technology—

---

日時：平成元年 2 月 21 日

14：30～17：00

場所：弘済会館

内容：

司会 猪瀬 博理事

講師 ハーバード大学教授

Lewis M. Branscomb 氏

パネリスト

植之原道行氏（日本電気）

岸田純之助氏（日本総研）

児玉 文雄氏（埼玉大学）

中川 良一氏（日産自動車）

山下 勇氏（JR 東日本）

閉会 植之原理事

2 月 21 日（火）午後、麴町弘済会館において、

ハーバード大学教授 Branscomb 氏による講演会が開催された。同氏は科学技術庁科学技術政策研究所の招きで来日、その忙しい日程の中からもわざわざ本アカデミーのために時間を割かれ、1 時間あまりにわたって講演されたものである。

講演は、猪瀬理事の挨拶・紹介と科学技術庁政策研究所長の挨拶のあと、軍事技術と民間技術の現状・あり方・流れ等について、詳細なデータを用い、かつ具体的な話があり、日米は技術革新のために協同すべきであると結んだ。

パネル討論は、それぞれの立場から意見が出された。

最後は植之原理事の挨拶で閉会となった。

参加者は 50 名で盛会であった。

なお詳細は“EAJ Information”として出版・配布の予定。



---

## 講演会—第 8 回 談話サロン 「先端技術開発における国際競争と協調」

---

日時：平成元年 3 月 31 日（金）17：30～20：30

場所：弘済会館

演題：「先端技術開発における国際競争と協調  
—超電導と超 LSI を例に—」

講師：(財)国際超電導産業技術研究センター  
超電導工学研究所 所長 田中昭二氏

### 1. 日本のショナルプロジェクト

(1) VLSI プロジェクト（1976～1980）



日本の未知のナショナルプロジェクトの中でドラチックな展開をしたもの。当時の金で700億円を使い、共同研究所をつくって4年間やった。当時の半導体産業の総売上が1,500億円位だったところにこれだけの金額を使ったのでインパクトは当然大きかった。とくにリソグラフィの基礎をなしているステップ等の技術はこのプロジェクトを通じて生まれた。VLSIという言葉は当時まだなかった。新しい言葉が生まれるということは新しいコンセプトつまりいままでのLSIとは内容的に異なるものがあることを意味しているわけで、日本でこの言葉が生まれたことは大変意義深い。ベル研究所などで似たようなプロジェクトが発足したのは1977年とのことで、1年先行したことは非常に大きかった。このプロジェクトにより日本の半導体産業の基礎が確立された。

#### (2) 光エレクトロニクスプロジェクト (1979～1985)

このプロジェクトでも共同研究所をつくって基礎的な研究をやった。このときもOEIC (OPTOELECTRONIC INTEGRATED CIRCUIT) という新しい言葉が生まれ、日本の光技術発展の基礎となった。末期頃に外国人も何人か参加してもらったが、この人たちが現在アメリカで、共同研究の必要性を盛んに説いている。

#### (3) 新機能デバイスプロジェクト (1981～1991)

超格子デバイスや3次元デバイスの研究に取り組みよい成果が出ている。このような先の見通しのはっきりしない研究に国が10年間も金を出すことは外国では考えられない。年に1回国際的に開かれたシンポジウムを開催するとか、ワークショップには外国人を呼ぶなど、国際的な動きがでてきた。

以上のように国のプロジェクトは次第に基礎よりになり期間も長くなってきた。

## 2. 新技術開発における協調と競争

新しい技術が生まれるときにはまず Precompetitive Stageがあり、ここでは Cooperation すなわち協調あるいは共同作業がなされる。これから Future Market に向けて進む段階で競争が行われる。アメリカ人たちがこういう図式はよくわかっているが、どうしたら Cooperation ができるかについてはよくわかっていない。

日本は協調と競争の調和をなんとなく肌で感じて、適当にうまくやっている。このやりかたをいかに国際的にまで広げて行くかということがわれわれ

に課せられた大きな課題である。こうした段階にでてきたのが高温超電導の問題である。

## 3. 高温超電導材料開発の展開

1911年に水銀で4°Kぐらいで超電導現象が見いだされたが、臨界温度は遅々として上がらず1972年に22.3°Kを記録して以来、この10数年間は0.1度も上がらなかった。1986年にベドノーズらによって酸化物で、高温超電導の可能性が示されて以来、一気に上がり、現在は125°Kというのが公認の最高記録になっている。沈滞していた研究も急激に活気づき、1987年の3月にはニューヨークで3,000人が集まり空前絶後という大会議が開かれた。このとき痛感したのはアメリカ人の強烈なナショナリズムである。日本の通産省の動きも注目されていた。議会もその後非常にハッスルし、超電導強化法案を提出した。また7月にはホワイトハウス主催で超電導の商業応用に関する連邦会議を開催したが、この会議には外国人研究者を締め出したため非常に評判が悪かった。レーガン大統領が11項目の政策を発表、これは日本を非常に意識したものとなっている。日米科学技術協力協定の見直しもこれに含まれる。米国側には、日本側の対応に関して日本の企業が入らないものは相手にしないという姿勢が見られ、産業界にアメリカ人を入れろとってきている。産業界もそろそろ海外からの研究者を受け入れる覚悟をしないといけない。

高温超電導の技術開発では、昨年の後半あたりから日米間に次第に格差が付き始めている。これには半導体をはじめとする日本の技術蓄積の効果が大きい。今後の技術予測の面でも日本の方がはるかに強気である。

## 4. 超電導研究における国際協調

前述のような情勢から、高温超電導研究については日本ははじめから国際協調ということ意識してやらないとたないであろうという判断のもとに、研究所をつくって国際化の窓を開くことにした。材料研究のプロジェクトをつくり、これに参加できる企業は内外無差別の原則をつくった。基本的にはこの方針は正しく、これまで外国から批判めいた論評はでてきていない。しかし1企業当たり1億円の参加費には心理的にも抵抗があるようで、まだ外国企業からの参加は実現していない。そこで海外の大学などからも研究者を受け入れるべく話を進めている。できたら研究員の1割ぐらいは外国籍にしたい。但

し知的所有権問題に関しては非常に厳密なアグリーメントを結ぶつもりである。

#### 5. 今後のあり方

今後もこのような例は数多く起こってくる。ナショナルプロジェクトの傾向からみても、次第に高度化しており、世界のどこでもやっていないことに金をつけようとしているわけで、このような場合に

は国際的にやっていくことが不可欠である。

先端技術開発を一国だけでやり、技術で突出しようとする時代は終わりつつある。国際化していくことが求められている。それも単なる協調だけでなく、われわれの方で金を出して勉強してもらうことも考えて行かないといけない。産業界も実際に外国人を受け入れてみれば心配するほどのこともなくかえってよい効果を生むとおもう。(文責 鈴木敏正)

---

## 講演会－第9回談話サロン 「学術国際交流雑感」

---

日時：平成元年4月11日(火)

17:30～19:30

場所：弘済会館

演題：「学術国際交流雑感」

講師：東京電機大学教授・理事

東京大学名誉教授

岡村 總 吾 氏

講演は、猪瀬国際委員長の挨拶と紹介で始められ、講師の長年にわたる豊富な経験に基づき、ユーモアを交えながら具体的に進められた。そして、国際交流にはまず語学力が欠かせないこと、表現の相違、先方の風俗習慣を熟知すること、そして最後に、思いやりのあるフレキシブルな金の使い方が重要な問題であることが強調された。

出席者は約50名、質問・意見が活発に出され、盛

会であった。

最後に植之原国際委員長の挨拶で閉会となった。



---

## 関西フォーラム講演会－第10回談話サロン

---

平成元年4月14日(金)  
於 関 電 会 館

かねてより関西における談話サロン開催の計画が進められていたが、このほど関西在住の役員の方々

のお骨折りで、平成元年4月14日(金)、大阪市中之島の関電会館で会員約30数名の参加を得て開催



された。

先ず、講演会は岩佐理事の挨拶及び司会に始まり、住友電気工業㈱副社長 中原恒雄氏（現理事）の「新素材について」、次いで三菱電機㈱中央研究所長 伊藤利朗氏の「レーガン加工装置について」、

の講演があり、双方とも活発な質疑応答がなされ盛会であった。

次いで開催された懇親会は極めて友好的で盛り上がりを見せ、時刻の移るのも忘れる位であった。

---

## 理事会だより

---

第1回理事会は5月15日の第3回通常総会に先立って、11:00より、日本工業倶楽部会議室において開催された。その概要は、

### 1. 第3回通常総会提案事項について

内容については、総会の進め方、提案事項の説明要領についての確認を行い了承された。

### 2. 平成元年度役員構成及び担務について

新役員構成と担務について説明があり、当面本案で実施することとした。

### 3. 退会ならびに会費未納者について

標記については、死亡1、退会希望者2、および会費未納者7名について報告があった。

### 4. 工学教育委員会について

標記委員会の設置については、既に了承されてい

るが、1月以降準備委員会で検討した結果、新年度より本格的に委員会として活動する事が必要であることを確認し、委員構成表と共に提案され了承された。

### 5. 広報委員会について

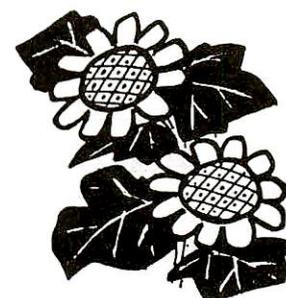
2項の理事分担事項の決定にともなう、広報委員会委員構成について説明があった。なお、今後推薦があった場合は、委員長に任せることで了承された。

これと関連して、委員の委嘱時期・任期等について、関係機関からの要望もあり、委嘱時期の統一・任期の明確化をはかることとした。

### 6. 準備金の解除について

準備金より約7,000千円の解除を了承した。

以 上



## 平成元年度 日本工学アカデミー役員構成

名誉会長・顧問：\*\*小林 宏治（日本電気㈱名誉会長）

会 長： \*\*向坊 隆（原子力委員会委員長代理・東京大学名誉教授）

副会長： 石川 六郎（鹿島建設㈱会長）

杉本 正雄（国産技術振興会理事）

中川 良一（日産自動車㈱中央研究所嘱託）

\*\*平山 博（早稲田大学理工学部長）

理 事： 石原 智男（日本自動車研究所所長） 乾 崇夫（玉川大学教授）  
（東京大学名誉教授） （東京大学名誉教授）

猪瀬 博（学術情報センター所長） 今井兼一郎（(社)日本工業技術  
（東京大学名誉教授） 振興協会理事）

今泉 常正（今泉事務所所長） 井村 徹（愛知工業大学教授）  
（東京大学名誉教授） （名古屋大学名誉教授）

岩佐 義朗（京都大学教授） 植之原道行（日本電気㈱技術顧問）

内田 盛也（帝人㈱常務理事） \*\*小口 文一（㈱富士通研究所会長）  
（富士通㈱顧問）

\*大谷 茂盛（東北大学学長） 大橋 秀雄（東京大学教授）

小堀 鐸二（鹿島建設㈱副社長） 末松 安晴（東京工業大学教授）  
（京都大学名誉教授）

鈴木 周一（埼玉工業大学教授） 高村 仁一（新日本製鉄㈱顧問）  
（東京工業大学名誉教授） （京都大学名誉教授）

\*中原 恒雄（住友電気工業㈱副社長） \*馬場 準一（三菱電機㈱顧問）

堀 幸夫（日本学術振興会常務理事） \*森田 正俊（㈱豊田中央研究所  
（東京大学名誉教授） 代表取締役）

柳井 久義（芝浦工業大学学長） 吉川 弘之（東京大学教授）  
（東京大学名誉教授）

米田 幸夫（東海大学教授）  
（東京大学名誉教授）

専務理事： 武田 行松（(財)C & C振興財団専務理事）

監 事： 伊藤 富雄（大阪工業大学学長・大阪大学名誉教授）

橋口 隆吉（日本学士院会員・東京大学名誉教授）

（備 考：\*\*留任・昇格、\*新任、無印一留任）

## 第2回臨時総会（昭和63年10月13日）以後入会された会員

（敬称略・順不同）

氏 名	所 属	専門分野
植 田 昭 二	三菱重工業株式会社 常務取締役	5-(1)
大 谷 茂 盛	東北大学 学長	1, 3-(1)
田 中 太 郎	日本電装㈱ 取締役社長	1
前 田 和 雄	三井造船㈱ 会長	6-(1)
三 野 定	住友建設㈱ 代表取締役副会長	4-(1)
竹 内 良 夫	関西国際空港㈱ 代表取締役社長	4-(1)
斎 藤 徹	大成建設㈱ 常任顧問	4-(1)
岡 田 宏	日本鉄道建設公団 副総裁	4-(1)
倉 田 進	日本シールドエンジニアリング㈱ 社長	4-(1)
久 野 悟 郎	中央大学理工学部 教授	4-(1)
池 田 俊 雄	長岡技術科学大学 教授	4-(1), 7-(1)
山 根 孟	東京電力㈱ 顧問	4-(1)
林 泰 造	中央大学理工学部 教授	4-(1), 4-(2)
三 笠 正 人	摂南大学工学部 教授	4-(1)
浜 田 俊 郎	近畿日本鉄道㈱ 相談役	4-(1)
近 藤 和 夫	㈱大阪市土木技術協会 特別顧問	4-(1)
河 野 彰	㈱日本建設業経営協会中央技術研究所 常任参与	4-(1)
宇佐美 昭 次	早稲田大学理工学部 教授	3-(1), 7-(6)
額 田 健 吉	㈱東レ リサーチセンター 相談役	3-(1), 3-(2)
田 村 康 男	早稲田大学理工学部 教授	2-(1)
大 頭 仁	早稲田大学大学院理工学研究科 委員長	6-(3)
隈 部 英 一	トヨタ自動車㈱ 常務取締役東京支社長	1-(1)
土 屋 喜 一	早稲田大学理工学部 教授	1-(1), 7-(6)
伊 藤 紉 次	早稲田大学理工学部 教授	2-(2)
福 村 晃 夫	中京大学社会学部 教授	2-(3)

## 平成元年度行事日程表

平成元年 6月 21日現在

### お知らせ

本年度の臨時総会は、  
10月12日(木) 大阪  
で開催する予定です。

### お知らせ

講演会 ー第13回談話サロンー バイオ関係  
8月23日(水) 17:30～20:30 虎ノ門パストラル  
「植物バイオへの挑戦ー企業の立場からー」  
三井石油化学工業㈱ 常務取締役  
藤田 泰宏氏

会議名	日 時	場 所
第9回談話サロン(国際)	平成元年 4月11日(火) 17:30～19:30	弘済会館
理事懇談会	4月12日(水) 17:30～20:00	大井町新事務所
第10回談話サロン(関西)	4月14日(金) 17:30～20:00	大阪市関電会館
理事会	5月15日(月) 13:00～	日本工業倶楽部
総会	〃 14:00～	〃
シンポジウム(材料)	6月14日(火) 9:00～15:30	池袋サンシャイン劇場
理事懇談会	6月21日(水) 17:30～19:30	大井町新事務所
第11回談話サロン(中部)	6月23日(金) 15:00～18:15	トヨタ博物館
第12回談話サロン(政策)	6月30日(金) 17:30～19:30	弘済会館
会員選考委員会	7月6日(木) 17:30～19:30	機械振興会館
理事会	7月12日(水) 18:00～20:00	機械振興会館
談話サロン(バイオ)	8月23日(水) 17:30～20:30	虎ノ門パストラル
会員選考委員会	9月7日(木) 17:30～19:30	機械振興会館
理事会	9月13日(水) 18:00～20:00	弘済会館
談話サロン(国際)	9月28日(水) 17:00～18:30	ホテルニューオータニ
酵素工学シンポジウム(バイオ)	10月2日(月) 9:30～16:00	建築会館ホール
臨時総会	10月12日(木)	大阪
談話サロン(材料)	10月27日(金)	ー国際シンポジウムー
談話サロン(政策)	11月 日( )	
理事会	11月15日(水)	
談話サロン(情報)	12月8日(金)	機械振興会館
理事会	平成2年1月17日(水)	虎ノ門パストラル
年賀詞交歓会	〃	〃
談話サロン(学会会議)	2月 日( )	健保会館
理事会	3月14日(水)	
談話サロン(情報)	月 日( )	



水野 滋 会員

株式会社品質経営研究所 取締役会長  
平成元年5月21日逝去 79歳

謹んでご冥福をお祈りいたします。

会費納入のお願い

日本工学アカデミー平成元年度会費を、御手数  
数ですが7月31日迄にお振り込みのほど、よろ  
しくお願い申し上げます。

編集後記

日本工学アカデミーの生みの親とも申し上げ  
るべき小林前会長が“高齢と一応の責任を果た  
した”として、会長辞任を申し出されたのが、  
昨年11月の理事会でした。

理事会は鋭意慰留に努めたことは勿論ですが、  
第3回通常総会の議長席に着かれた小林前会長  
御自身はもとより、創立にあたって一緒に御苦  
労された方々には特に感慨深いものがあったと  
拝察いたします。

日本工学アカデミーの創立スタートに当たっ  
ては、小林前会長の存在が如何に重要であつた  
かと言うことは、今更申し上げる迄もないこと  
ですが、なお名誉会長として今後とも御指導下  
さることになり安堵するとともに、ますますの  
御壮健をお祈りする次第であります。

第3回通常総会も無事に終わり、本会も第3  
年目を迎えることとなりますが、本会ニュー  
スも益々充実を期しております。第9号は各委員  
の御努力で、自賛かも知れませんが、量質とも  
に充実したものになりました。

なお、かねてより計画しておりました、ファ  
イルが出来上りましたので第9号と一緒にお届け  
いたします。年報、Informationおよびニュー  
スの整理に御利用下されば幸いです。

(編集子)

“事務局の所在地”

日本工学アカデミー  
〒140 品川区大井1-49-15 住友生命大井町ビル8階  
TEL 03-777-2941  
(JR大井町駅南口、東急大井町駅下車……2,3分。  
ホテル阪急裏)

